

## ワイルドの時代とシャーロック・ホームズ

堀江珠喜

私にとって「世紀末」とは「ワイルドの時代」に他ならない。つまりワイルドを通して世紀末を見、またワイルドの介在する世紀末に魅せられるのである。従って少しでもワイルドに関係のある事柄ならば、できる限り調べたいと思っている。コナン・ドイルやシャーロック・ホームズへの興味も、もとをただせばこうした動機によるのである。

もっともワイルドとドイルとのあいだに、それほど親密な付き合いはなかった。最初に会ったのは1889年、リピンコット社が二人に小説の執筆を依頼するために設けた席上である。こうして『ドリアン・グレイの肖像』と『四つの署名』とが生まれた。

これらの作品がそれぞれの著者に栄光へのきっかけを与えたことは興味深い。数年後、劇作が当たり有頂天になっているワイルドと会ったドイルは「狂っている」と記している。

どうやらこの二人が顔を合わせた記録は、このくらいしかなさそうだ。が、ドイルは、1920年になってから、再びワイルドと接触することになる。この頃、心霊術に凝っていたドイルは、ワイルドの自動書記が発表されると、これに真面目に取り組み、本物であると論じるのである。そのためには当然ながら、ワイルドの作品、性格、筆跡をも調べなければならない。その意味では、死後20年余りして、やっとこの耽美主義者との本格的な付き合いがなされたわけである。

ワイルドとドイルとの接点はこの程度であるから、むしろ「世紀末」をさぐるにはシャーロック・ホームズに視点を移した方がいいかもしれない。その執筆年代はともかくも、60編のうち44編までが1886—1900年を背景にしている。しかも多くの場合、舞台はロンドンであるから、フィクションとはいえ世紀末研究には貴重な資料といえよう。

ただしホームズの正典（ドイルが書いた60編を、シャーロキアンはこう呼ぶ）に、ワイルドの名は見当たらない。とはいえ世紀末のロンドンで、この二人が顔を合わせるような話があっても不思議ではあるまい。ちなみにホームズは、ワイルドと同じく1854年の生まれでオックスフォードの出身と考えられている。

というわけでホームズもののパロディには、ときどきワイルドが登場する。邦訳で手に入るものにはジャン・デュトゥールの『ワトスン夫人とホームズの華麗な冒険』（講談社）、ニコラス・メイヤーの『ウエストエンドの恐怖』（立風書房）、M・J・トロアの『霧の殺



人鬼』（早川書房）などがある。邦訳はないが、William Rushtonの*W. G. Grace's Last Case* (Methuen)ではメルモスことワイルドが、ワトスン達をムーランルージュへ案内したりする。その横をゾラが「J'accuse!」と叫びながら通り過ぎるのを読むと、吹き出さずにはいられない。

もちろんホームズは実在の人物ではない。にもかかわらず世界中にホームズのファンがいて、知的なお遊びを楽しんでいる。ホームズ自身が架空、つまり実体がないので、それを追究するにはまわりから手をつけなければならない。すなわち背景を明らかにしていくことで、人物の輪郭を把握しようとするのである。これが「世紀末研究に至る結果となる。

ホームズの人気は一般的に、その正義感と健全さによるものであろう。犯人を追いかけるホームズは、猟犬のイメージを提供するようで、アニメになった*Sherlock Hound*のように、犬として描かれるパロディも生まれている。

しかしながらホームズにはこれとは正反対の一面もある。女嫌いのダンディで、アフォリズムを吐き、アンニュイにおちいるとコカインを注射する。あまり外出を好まず、パイプを片手に瞑想にふける。まさにポーのデュパンを連想させるデカダンな雰囲気につつまれているのである。

また立身出世を望まぬ精神的貴族で、「仕事の為の仕事」のみを引き受ける芸術至上主義的態度は、いかにも世紀末的といえよう。そのうえホモセクシュアリティの問題もある。

ホームズのホモセクシュアル説は、シャーロキアンのタブーらしいのだが、オスカーリアンならば、何の偏見もなく議論を進められるに違いない。例えばホームズがワトスンの手や手首を握りしめる行為に、友情以上の意味を見出すことを躊躇しまい。なぜホームズの唯一惹かれた女性がわざわざ男装をして現れたのか。同性愛的傾向のあるゴードン將軍や、男色讃美の詩人カタラスに言及しなければならないのか。このような事柄にも注意を向けることだろう。

あるいはオスカーリアンなら『高名の依頼人』を読んで『ドリアン・グレイの肖像』を思い浮かべ、ワイルドの世界との共通項を確認するかもしれない。このようなシャーロック・ホームズとの付き合いは、我々オスカーリアンの特権なのである。